

韓国仏教における華嚴信仰の展開

— 華嚴法会を中心として —

李 杏 九

韓国仏教における教学仏教の中心思想は、華嚴思想であることは言う迄もないことである。遠く新羅、高麗の時代より近くは李朝時代に至るまでの間に於て華嚴法会が数多く行われたことがわかる。

『高麗史』等の史書に依れば、高麗時代だけでも八十三種の法会が一〇三八回も行われたが、高麗史は本来儒教的立場に立つて編纂されたものであって、王室や貴族に関する記述がその中心となっており、一般庶民の信仰に就いては殆ど触れていない。高麗時代の法会は護國的側面から取り扱われ、宗教的信仰の立場からの研究はほとんど見ることができない。ここでは、新羅、高麗、李朝時代における華嚴法会を通じて華嚴経が如何に読誦され、伝承されて来たであろうか、その展開を考察して見たい。いまこの問題を考察するにあたり、韓国仏教の時代区分を通常は三国時代、新羅時代、高麗時代、李朝時代に分けるのであるが、本稿では便宜上新羅、高麗、李朝の三時代に分けて論述する。

新羅時代の華嚴法会は主に講經法会が中心である。経を講ずることによって依つて功德利益があると言う考え方から講經信仰が生じ、それが形式化された宗教儀礼として講經法会が出来上つたのである。新羅時代に行われた華嚴法会は、史伝上多くは見当らないが、『三国

遺事』『円集文類』等にいささか見られる。

即ち、『三国遺事』卷四、慈藏定律条に

又改營生緣里第元寧寺^一 設落成会^二 講雜花万偈^三 感五十

二女^一 現身証聽^二 使門人植樹如其数^三

とある。慈藏が唐より帰国の後、通度寺を建て、戒壇を築き、自らの生まれた家を元寧寺として建立して、その落慶法要を催し、華嚴経を講じたが、その時五十二人の女性が感応してそこに集まり法を聴聞したと伝えられる。この法会が設けられた年代は明らかでないが、慈藏が仏舍利仏頂骨等を持って帰国した西紀六四三年頃ではないかと考えられる。又同じく『三国遺事』第五卷に

投湘公^一刺染為^二弟子 名曰真定^三 居三年^四 母之計音至^五 定

跏趺入^レ定七日乃起……既出^レ定以後 事告^二於湘^一 湘率^二門徒^一

歸^二于小伯山之錐同^一 結^レ草為^二盧^一 会徒三千^三 約九十日講^二華

嚴大典……講畢其母現^二於夢^一曰 我已生天矣

とある。ここで湘公とは智儼より華嚴を学び、その奥旨を体得して帰国した後、海東華嚴の初祖と称せられた義湘を指すのである。義湘は六七一年帰国の後、華嚴を弘通させる為に華嚴十刹を建て、上元元年(六七四)には自らの出家寺である皇福寺に於て『華嚴一乘法界図』を講じたこともある。上記の文に見られる如く、義湘は門徒三千人を集め、約九十日間にわたって華嚴経を講じた。講義が終った後、義湘の十大弟子の一人である真定の夢に亡くなった彼の母が現われて「私はすでに天に生まれた」と言ったという。

以上の如く、この二つの文献から次の如きことが考えられる。つまり第一は、新羅時代の講經は經典を講義し、解釈してその内容を理解すると言う講經法会の本来の意味に於て理解され、第二は、講

經が単なる講經儀礼で終るのでなく、そこには一つの宗教的信仰が現われている。即ち、華嚴經を講ずることに依って奇瑞が起り、神異が現われるという華嚴經信仰が現われていると思われる。

高麗仏教は儀礼仏教であると言われている。従って華嚴法会も数多く行われ、その類型も多様で、例えば、祈福や消災を目的として設けられた読經法会や仏徳を讃歎供養し、以て善根功徳を修しようとした慶讃法会、さらに外敵の侵入から護ろうとして勤められた神衆法会との三つに大別することができる。ここでは華嚴經の読誦法会のみについて考察する。仏教において經典を読誦することは重要な意味を有するが、祈禱を目的とした読誦は、普通転經又は転読と言われている。華嚴經の転読法会を『高麗史』に見ると、文宗条に

七日 百官設華嚴經道場于興王寺五日 祈風雨調順」とあり、同じく『高麗史』毅宗元年条に

五月 禱祠于靈通寺 講華嚴經五十日、

と記されている。同じく『高麗史』明宗十三年条には

四月 大設華嚴法会于洪園寺 薦庚戌以来死亡者」とある。

この三つの記事に依って次のことが考えられる。即ち、高麗時代における華嚴經の転読法会には現世的な祈福信仰が強く現われていること、他の一つは祈雨や祈嗣、亡者の冥福を祈ること等祈禱的な目的に華嚴經が読まれたことである。これは經典読誦の本来の意義が失われて単に儀礼的な意味で行われた祈福信仰のあらわれと言えるであろう。

李朝時代の華嚴法会について文献に現われているのは少ない。勿論華嚴經を所依にした慶讃、祈禱の法会がないことはないがその内容は高麗時代のそれとほぼ同じである。ただここで注意すべきこと

韓国仏教における華嚴信仰の展開（李）

は、李朝時代の華嚴法会における疏や文等には国王の長寿や国家の安泰を祈った内容が多く見られることである。『東国李相国集』に
烈三十五日之法筵 談三九會之主旨……伏願聖上陛下 嚮三箕
疇之五福 坐擁太平 等三竺室之万壽 五兵火戢 四海波恬
とある。このように国王の長寿と国の安泰を祈る文は『楊村集』

『東文選』等にも記載されている。排仏政策で一貫された李氏王朝

下の仏教は、教学の不振、教団の衰微などの受難の続く時代であっ

た。このような受難期にあつて韓国仏教々団はすこしでも王室との

結びつきを計って新しい転換を模索するのであったと思われる。

以上韓国仏教における華嚴法会に現われた華嚴信仰について述べ

たのであるが、これを振り返って見るに、新羅時代は、華嚴經の講

經、読誦に依って、奇瑞、神異が現われると言う感応信仰であり、

高麗時代は、仏の冥加に依って福を求めんとした現世利益の祈福信

仰であり、また李朝時代にあつては教団の受難を打開するを目的と

した華嚴信仰が成立したといえよう。

- 1 徐閔吉「高麗の護国法会と道場」『仏教学報』第十四輯 一
二一頁。
- 2 趙明基『新羅仏教の理念と思想』四六頁。
- 3 一然『三国遺事』卷第四（大正蔵卷四九、一〇〇五頁）。
- 4 一然『前掲書』卷第五（大正蔵四九、一〇一七頁）。
- 5 『高麗史』卷七 文集三十七年条。
- 6 李奎報『東国李相国集』卷四一。

（仏教大学大学院）